

## 「消えた伊集院静」

伊集院静が「週刊文春」から消えた。1950年生まれの作家。数々の文学賞を受賞しているが、私にとっては日本レコード大賞を受賞した「愚か者」や「ギンギラギンにさりげなく」などの作詞家としてのほうが馴染みが深い。

2010年彼は週刊文春の「悩むが花」という人生相談コーナーの回答者として登場した。私は高山正之のコラム「変見自在」を連載している週刊新潮は毎週毎号購入するが、週刊文春には縁が無かった。今から3年前だと思うが、学院近くの喫茶店で「悩むが花」を目にしてから、彼の回答の斬新さと痛快さに惹かれ、購入はしないが毎号目を通すようになった。私の相談業務の参考になる回答の仕方も随分あった。

「結婚予定の彼女の病院での仕事ぶりを偶然にも見た彼氏が、彼女の鬼の形相と怒鳴り声の対応を見て彼女の一面を見てしまった後悔で結婚を躊躇している」という相談に、伊集院は「彼女のその言動は彼女の一面ではなく、彼女の生き方そのものと」と弾劾し、「その形相を見たことは不運でもなく不幸でもなく、実は幸運だったと思いなさい」と結論付けていた。あやふやな言い方をしないのが伊集院の回答だ。

しかし、この一年間の彼の回答は、相談に対し辛口の次元を超え、相談者を叱りつけるような回答が続いているように思えた。もうすぐ子どもが生まれるという夫婦の「両親が生まれてくる孫の名前を付けたがるので困っている」という相談には、「あんたら夫婦が無い知恵を絞ってもムダ、自分たちだけで子どもの名前を付けたいなんてバカな発想。世間知らずが！」と切って捨てた。この回答には同意したい部分もあるが、ちょっと辛辣。

彼は読者に新しい発想と考え方を伝えたいと望んだ。しかし、質問そのものがつまらないものになり、質問者をけなすしか書きようがなくなったと嘆き、「『汐時』はまさに今です」と連載から辞退した。

かたや日大アメフト薬物事件で揺れ続け力量が問われている理事長・林真理子(作家)は、同雑誌のコラム「夜ふけのなわとび」で悠長な連載を続けている。伊集院は「作家もたくさんいるが、夏目漱石、トルストイ、シェークスピア、ジェームス・ジョイス以外はみんな雑魚」と言ったが、林真理子の緊張感のないコラムは読むに耐えない。

伊集院の最後の言葉は「こんなもん読んでるアホにはもうつきあいきれんわ！」だった。私は3年間毎週楽しみに愛読していたのに、最後はアホにされてしまった(笑)。

(丹羽 豊)